



文学部
教授 **積山 薫**さん
Sekiyama Kaoru

●プロフィール

1976年 お茶の水女子大附属高校を卒業
1980年 早稲田大学教育学科卒業
1986年 大阪市立大学院博士課程終了、文学博士。
ART視聴覚機構研究所研修研究員
金沢大学文学部助手
公立ほこだて未来大学システム情報科学部教授
2006年 熊本大学文学部教授

逆さ眼鏡との出会いから、心理学の研究者へ

心理学というと、ユングやフロイトの精神分析を思い浮かべる人が多いのですが、積山さんは認知心理学の研究者です。もともと理系が好きで、脳の中をのぞきたかった。自分のことを客観的に見たいという思いで早稲田の教育心理学へ進学。そこで牧野達郎教授に出会ったことで、研究者を目指します。

「牧野先生が見せてくれた逆さ眼鏡。その眼鏡をかけると、右手と左手が逆に見えます。右手がこんなに見えるのはおかしい。記憶の右手と違う。ところが、逆さ眼鏡をかけて生活すると数日でその矛盾感がなくなり、数週間で空間のとらえ方も変わります。逆さ眼鏡をかけることで、今までは働かなかった脳の一部が活性化されます。」この実験をきっかけに認知心理学にのめりこみ、これをライフワークにしようと、決意しました。

早稲田大学を卒業後、大阪市立大学大学院へ。とにかく専門書を読み、実験に明け暮れました。民間の情報通信研究所に勤務し、民間の技術者から啓発を受けたことも今日の基礎になっています。

家事に分担はあたりまえ、大学教員の夫に支えられて

その後、北海道で情報系の単科大学「公立ほこだて未来大学」が創設され、教授として赴任。ここで、47才のとき結婚。夫は職場の同僚。「二人とも同じ大学の教員として働いていたので、家事は分担するのがあたりまえでした。」ほこだて未来大学は情報系大学だったため心理学を徹底的に研究したいという学生が少なく、ものたりなさを感じることもあったとか。そんな折、熊本大学から教授の公募に応じて熊本へ。「夫を函館に残して単身赴任しました。北海道に帰るのは、年に5、6回ほど。夫が熊本に来たり、出張先の東京や札幌でおちあうこともあります。相談や連絡はメールとか電話でよくしているので、コミュニケーション不足はそれほど感じません。お互いの仕事をよく理解しているので、さらに高い成果を求めて、言葉ではいいませんが、励ましあっているような気がします。」

認知症の予防にも応用されるか、脳の可塑性の研究

「人の脳は、可塑性を備えています。最近、子どもたちのパソコン・ゲームへの批判がよく聞かれますが、ゲーム習熟者は目標物の検出など、ある種の視覚能力がゲーム初心者より優れているそうです。また、お年寄りの認知症も、コミュニケーション不足や考えることの停止によって、脳の一部の機能が低下してくることも原因と考えられています。好奇心をかきたて、いろいろなことにチャレンジしていくことで認知症は防げるかもしれません。人間はさまざまな可能性を秘めているのです。脳のどんな機能を計測すべきかというのは、何よりも心理的な行動的データなのです。」積山さんの研究が認知症の予防に役立つことが期待されます。



左右反転めがねのプリズムを通してみると、指輪をしている左手が右手のように見える。

人間の不思議さと可能性を探る心理学の研究。